

音樂沿革史

中一冊

62
255

10

明治二十六年六月
第十日出版



音樂沿革史

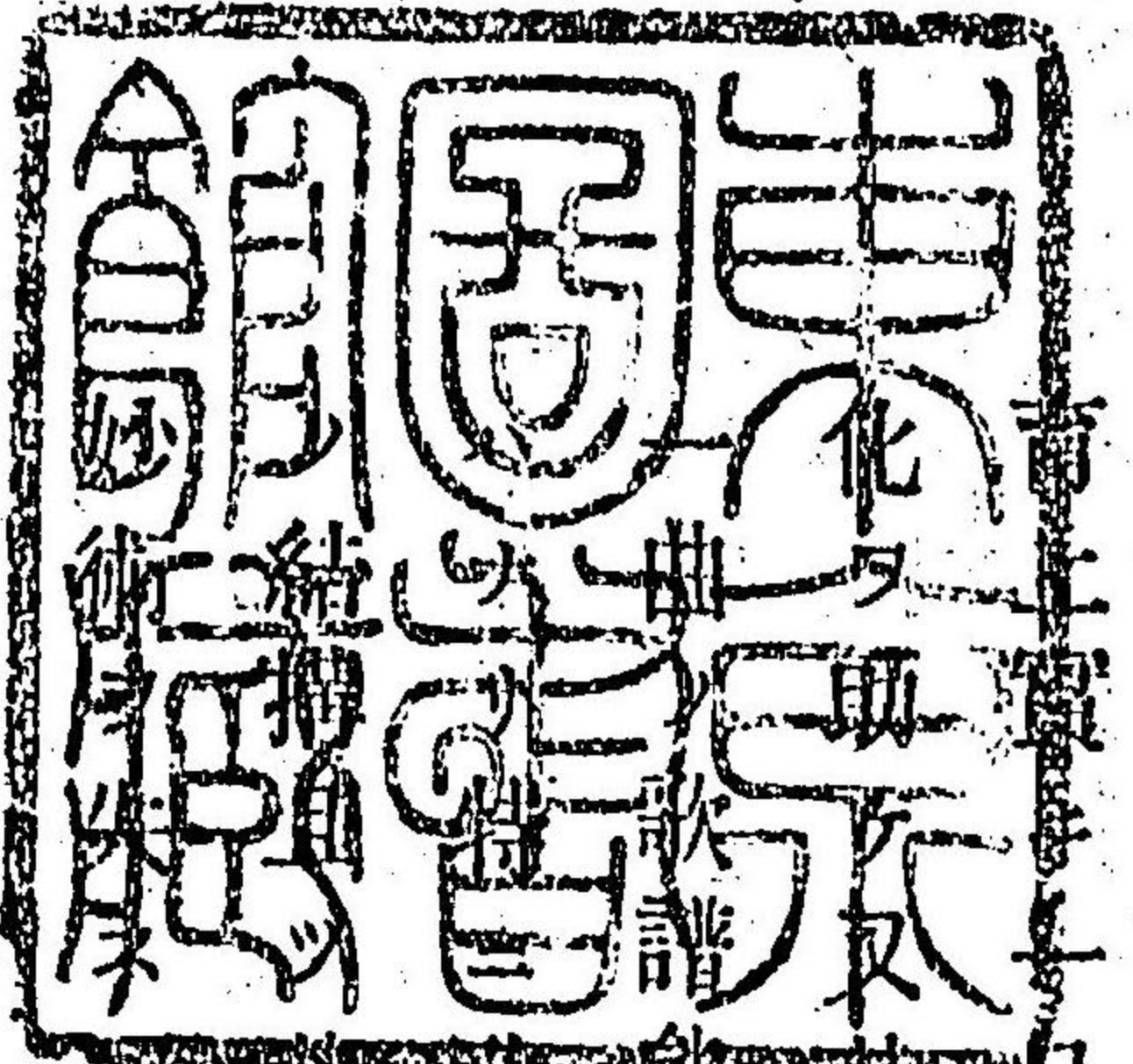
佛國ラボワール氏原著
日本村越 銘譯述
日本四元義豊校閱
日本近藤時明校閱
日本永井建子圖画

音樂沿革史跋

明治二十年六月二十日內務省交付

今ヤ吾邦百般ノ事物日ニ倍々改良ヲ加ヘ漸ク其正格ニ

入ラントスルノ秋ニ際セリ就中音樂ノ如キニ至テハ教



育上實事トモ欲ク可カラズシテ德育ヲ涵養シ隨テ風

化ヲ取テ其當代ノ人心風俗ヲ寫シ得ル活寫眞ニシテ

曲ノ歌譜能ク其當時ノ現狀ヲ察知スルノ一要具タレ

歐洲ノ音樂ノ如キハ能ク學理ニ合ヒ其組織

其曲譜ノ正確タル微音妙調毫モ作者ノ奇技

ノ患ナクシテ萬代ノ後ニ猶ホ其眞味ヲ存

スルヲ得ヘシ本邦從來ノ音樂ニ至テハ唯タ一ノ美術的

ニ位スルノミニシテ正格タル曲譜ナク全ク遺心傳心ニ

止マル一秘術タルヲ免レズ故ニ益々其演者ノ勝手ニ任
セ之ヲ流布スルヨリ遂ニ猥俗ノ弊曲都鄙ノ別ナク徒ラ
ニ隆盛ヲ極メ陋巷ノ婢婦亦巧ミニ其技ヲ演シ爲メニ其
風俗ノ傾向モ亦忍フ可ラザル習弊猥雜ニ流レ其弊勢殆
ント防矯スルノ實ナキカ如キニ至ル噫佞令全國ノ教育
ヲ盛ニスルモ先ニ此音樂ノ一事ヲ改良薰陶セザル時ハ
容易ニ其國病ヲ矯療スルヲ得サルベシ近頃茲ニ見ル人
アリテ其弊習ヲ改良セントスルノ意ニ起ルヤ頻リニ從
來ノ歌詞ヲ更ヘ舊曲ヲ改メテ俗曲改良ノ點ニ著目スル
者往々少ナシトセサルカ如シ愚ヲ以テ之ヲ考フルキハ
前述ノ如ク過去古代ノ風俗ヲ察知シ其經歷沿革或ハ國

勢進步ノ度ヲ推測シ得ルノ便アレハ古曲ハ唯其儘ニ存
シテ寧ロ新作ノ製曲ヲ務ムルノ善キニ若クモノナク音
樂改良ヲ謀ルノ一捷徑タラント信スルナリ素ヨリ歐洲
ニ於ルモ吾邦ニ於ルモ樂ノ起ル基源ハ更ニ異ナル所ナ
クシテ唯タ世ト共ニ其改良ヲ加フルト加ヘサルトノ差
ニシテ洋^ビ琴ノ箏ニ同シキ「バイオリン」ノ胡弓ニ同シキ風
琴^ガノ笙ニ同シキ又或ハ却テ三味線ノ「ギール」ニ勝ル
如キアレハ此等ノ差異ハ皆ナ改良ノ度數ニ關スルト又
タ理學力ノ乏シキト乏シカラサルトヨリ起ルニ外ナラ
ズ事皆ナ其起因根源ヨリ之ヲ質サザレハ其完全タル結
果ヲ成就スルヲ難カルベシ今ヤ歐洲ノ樂盛ニ本邦ニ

舶來シテ續々良師ノ輩出スル未タ其良書ニ乏シキ欠點
 アリ余カ知己陸軍教導團譯官村越銘君非常ニ音樂改良
 ノ事ニ熱心セラレ頻リニ其改良ノ幫助トナル樂書ノ乏
 シキヲ憂ヘラレ良書ヲ擇ンテ之ヲ譯述セラル、其數已
 ニ數類今又歐洲音樂ノ沿革史ヲ譯述セラル、ノ美譽實
 ニ良師ノ現出ト共ニ此良書ノ譯述アル實ニ音樂改良ノ
 途ヲ開カル其益果シテ幾何ゾヤ余モ亦氏ト感ヲ同フス
 ル所アルヲ以テ之ヲ聞クヤ雀躍シテ自吟獨舞ノ狂姿ヲ
 覺ヘザルナリ世人常ニ余ヲ戲評スルニ音樂狂子ト稱スルモ敢テ當ラサルニアラサル乎嗚呼此書一
 タヒ世ニ行ハル、ヤ其益スル所實ニ思フベキナリ氏ト
 一夕對酌ノ間世人ノ笑ト氏ノ良書ヲ汚ストヲ顧ミズ耳

間ノ鉛筆ヲ捻ツテ之ヲ跋ス

狂子

四 竈 訥 堂

音樂沿革史

緒言 序文ニ横シテ定名ヲ畧説ス

第一編 音樂、音、句、節、音節、合調、音色、樂器、音樂沿革史一般ノ企圖

音樂ハ耳ニ好ロシキノ方ヲ以テ諸音ヲ和合スルノ術ナリト此定名ハシヤンシヤツク
以テ未完ト言ハサル可ラス見ルヘシ音樂ハ單々多少娛樂ノ感情ヲ起サシムル
ヲ主旨トスルモノトセハ之レヲ他般ノ術ニ劣ルノ一術ト言ハムノミ然ルヲ况テ感情
ル者時世年代人物ニ就テ異同アルニ於テヤ



感ヲ惹起スル目的ヲ以テ書シタル者アルハ現ニ余輩ノ目撃スル所ナリ憂哀痛苦素ヨ
リ人ノ欲スル所ニ非ス然ルヲ人此種ノ紙片ヲ尊崇シ尙ホ常ニ音樂部類ノ中ニ置クナ
リ
モ是モ音樂ニ非ズト言フノ謂レナシ或ハ又古代ノ音樂大家ヲ偏慕スル者ハ中世ノ
作者カ作曲トシテ用タル快活新奇ノ工風余輩ノ欽慕スル者ヲ以テ默視ス可ラストス
モ亦是モ音樂タルヲ免レス加之歡娛快樂ヲ目的トセサルノミカ尙ホ憂哀痛苦ノ
感ヲ惹起スル目的ヲ以テ書シタル者アルハ現ニ余輩ノ目撃スル所ナリ憂哀痛苦素ヨ
リ人ノ欲スル所ニ非ス然ルヲ人此種ノ紙片ヲ尊崇シ尙ホ常ニ音樂部類ノ中ニ置クナ
リ

ベルリヨズ或ル時只管人ヲ歡ハスノ曲ヲ作ルヲ旨トスル樂人アドルフアダムニ言ツテ曰ク然ラハ汝チ人ハ音ニ音樂ヲ其喜愉ノタメニ聽クト思フ歟ト是レ固ヨリ一戲言ニ過サレ雖モベルリヨズノ言タル暗ニ其真意ヲ掩翼セリ

今日吾人カ音樂トシテ了解スル所ノ者ハ屢々喜愉快樂ノ感ヲ誘起スルノ術トナルヲアルハ眞ニ然リト雖モ寧口之レヲ以テ意思ヲ吐露スルノ有力ナル一方トスルコソ當ヲ得タルモノナランカ

夫レ音樂ノ目的タル天賦高尚ニシテ唯余輩ノ耳ニ諳ヒ以テ之レヲ慰ムルノミコ止マラス猶ホ喜怒哀樂ノ情ヲ起サシムルニ在リ

世人ノ致味屢々變遷シ專要ノ法今昔同シカラスト雖モ必竟スルニ永久批判ス可ラサルノ曲ハ彼ノ一時ノ喜愉ノタメニ作リタル者ニ非サルナリ今マ定名ノ論ヲ措キテ識者ニ希望ス此音樂テウ術ハ高尚不可思議ノ一術ニシテ其純然固有ノ性ハ時世人物ニ從ツテ種々ノ效用ヲナス者ト認諾シ虚心平氣能ク鑑定ヲ降タシ以テ細大ノ要旨ヲ悟リテ此卷ヲ納メハ幸福此事ナリ

音樂ニ於テ基本構造的ノ原材ニアリ之レ無キトハ音樂ナル者無シ何ツヤ音及句節是ナリ聽學的ノ關係ニ從ヘハ音ハ一物体ノ微分子震動シテ吾人ノ耳ニ正整ノ打撃ヲナス所ノ者ナリ

此震動ノ疾徐ニ從ヒ音ニ銳鈍ノ別ヲ生ス俚俗之レヲ誤ツテ差別スルニ高低ナル語ヲ以テス

間隔トハ震動相互ノ差異ナリ余輩斯ノ如ク言フト雖モ此處ニ聽學或ハ音樂ノ學理ヲ論スルノ要ナシ單ニ一言ヲ吐シテ説カントスルモノアリ他ニ非ス各般ノ方法ニ從ヒ諸音ヲ併列シタル者之ヲ律ト言ヒ而シテ此律ノ合式ヲ總稱シテ段量(俗ニ言フ調子)ト言フ地球上凡ソ一人種ノ住居スル所ハ各所其時代ヲ異ニシテ此段量ヲ變遷シタリ是レ音樂沿革史上ニ著明ノ變動ヲ醸出シタルノ一因ナリ

句節トハ正整或ハ不整ノ間ニ於テ音ノ休止或ハ駐止ノ感覺ヲ耳ニ觸知スル様諸音ヲ整列スルニアリ

音樂ヲ以テ言語ニ譬ヘンコ音ハ言辭ニシテ句節之レヲ連結シ以テ章句ノ体裁ヲ成ヌカ如シ句節ト音ト相合シテ所謂音節ヲ生來シ爰ニ至ツテ彼ノ言語章句其精中密切ノ意味ヲ取ルナリ故ニ音樂ハ萬般ノ國語中其音節國音ノ尤モ柔軟斯文ナルモノナリ句節及諸音ノ結合物ハ自昔至今増殖幾ント極リナク尙ホ今日ニ至ツテ其變式異様遠ク未タ之レヲ用ヒ盡クスニ至ラス往昔幼稚單簡ノ經驗ヨリ尤モ精鍊ヲ遂ケタル一術トナルノ現時ニ至ルマテ音樂ヲ構成スル者ハ此結合物ノ他ニアルコトナシ

音樂家段量句節ノ則ニ檢束セラレ各音ヲ單個逐次ニ唄フヲ以テ満足セス二三或ハ

多數ノ音ヲ重層シ一時ニ之レヲ聽カシムトノ意思ヲ抱ク是レ合調術ノ起ル所以ニシテ即チ合調術ナル語ニ解釋ヲ下タスコト左ノ如シ
 合調術ハ多數ノ音ヲ一時ニ聽カシムル様諸音ヲ和合スルノ術ナリ
 諸音ヲ重層シタル集合物ハ差別判然タル二性質ヲ呈出ス即チ一ハ耳之レヲ聽イテ靜止安然ノ思ヒヲ感スル者他ハ耳ヲシテ懸空飄然タルノ感ヲ抱カシムル者是ナリ然ルニ人皆ナ音楽ニ此靜止ノ性アランコトヲ望ムカ故ニ此性ノ音楽ニ必要ナルハ堂々動カス可ヲサルノ定論トナレリ

甲ノ場合ニ於テハ合調ヲ和音的ト言ヒ乙ノ場合ニ於テハ之レヲ不和音ト言フナレモ時代ニ依リ不和音カ和音ト成リ又和音カ不和音トナリタルハ如何ノ變動ニ依因スルヤハ此沿革史ニ依ツテ明知スル所ナルヘシト雖モ之レヲ要スルニ彼ノ合音ナル各符重層物ハ必ス此二區別ニ依テ指名スルモノナリ
 段量句節合調ニ次キ來ツテ第四原材トナル者アリ音色即是レナリ此者音樂中ニ勤ムルノ職前ハ猶彩料ノ繪畫ニ於ルカ如シ
 人音ニ唱歌スルヲ以テ足レリトモス爰ニ各音ノ變換ヲ自在ニシ得可キ模擬聲音ヲ擬明センコトヲ企テタリ是レ樂器ナル者ノ發明アル所以ナリ
 太古ヨリ今日ニ至ルマテ樂器ノ數實ニ多シト雖モ之レヲ三大軌範ニ分ツ

第一 絃屬樂器 第二 風屬樂器 第三 打擊樂器

此絃屬樂器ヲ小分シテ二類トナス即一ハ「ヴィヲロン」(我國ノ胡弓清樂ノ胡琴琵琶ノ如シ)ノ如ク小弓ヲ以テ絃ヲ震動シ他ハ「ギター」(我三絃ノ如シ)指ヲ以テ彈シテ震動ヲ發コス者又「琵琶」(我國ニ撥アルカ如シ)ヲ以テ鳴ラス者アリ即チ磨奏彈奏ノ二類ナリ

風屬樂器ヲ三種ニ分ツ曰ク「簧製樂器」即チ「フリユート」「横笛」ノ如ク空氣一ノ菱角ニ觸レ碎ケテ震動ヲ起ス者單或ハ復簧製樂器等即チ「クラリネツト」「オーボワー」ノ如ク皆「ロゾー」木(腔)ノ一種ヲ以テ作りタル舌子ヲ附シ唇ヲ以テ之レヲ震動シ從ツテ樂器ノ体中ニ在ル空氣ニ震動ヲ傳ヘテ之レヲ鳴ラス、口子裝架ハ空氣一ノ瓶子ノ如キ者ノ中ニ力壓セラレ狭少ナル一孔ヲ通過シテ一或ハ多數ノ管中ニ疾走シテ鳴動ヲ發ス此管多クハ銅製ナルヲ常トス即チ「トロンペツト」「コール」「トロンボンヌ」(即チ喇叭種屬)ノ如シサレハ此種ノ樂器ヲ總稱シテ銅製樂器ト言ヘリ
 最末列ノ種屬打奏樂器ハ即チ「タムプール」「ドラムスク」「鼓」ノ一面ノ如ク一層ニ皮ヲ張りタルモノ、周圍ニ鈴ヲ附ケタル者)ノ如ク手ヲ以テ打撃シ或ハ太小鼓類「タムパール」ノ如ク撥ヲ以テシ半鐘、々子、ノ如ク槌ヲ以テ打ツモノ及「カヌタゲツト」「サムパール」(鏡)ノ如ク相擊突シテ發音スルモノ是ナリ

往古ヨリ余輩ノ今日ニ至ルマテ上ニ言ヘル樂器ハ多少其形狀ヲ變移シタレモ其之レヲ鳴ラスノ法ハ依然ト絃、簧、簧、口子、打擊ノ五方ニ依ルモノナリ斯ク定名ヲ論説スル一實ハ退屈ニ堪エサルノ感ヲ免レヌト雖モ又飲ク可ラサル所アレハ讀者乞フ暫ク欠伸ヲ忍ヘ音、句、節、音色、ハ言ハゞ此歴史中重立タル人物トナリ以テ歌章、分量、合調、樂器編成法、ヲ組織ス。

余輩今マ音樂ノ初原ヲ論スルコトヲ休メテ眼ヲ一方ニ轉スレハ自由開墾ノ土地狹少ナラス比喩推測ノ餘祐漠然前ニ廣シト雖モ余輩既ニ此自由ヲ濫用セリ果シテ範圍ヲ擴メテ駸々乎ト進ンテ哲學、動物、曆史學ノ域ニ闖入シ技術ノ歴史タルノ体裁ハ誠ニ微々タルカ如シ

先ツ一着トシテ東洋古代人民即チ埃及、亞西利、人ヨリ始メ其音樂ナル術ノ眞ニ成存シタルノ時代ヲ涉獵シ希臘羅馬ヲ過キルコト方ツテ古代ノ音樂ト近世ノ術トヲ結合スルノ緣故ヲ探求スルノ企謀アルベシ抑々音樂歷史上ニ於テ欲文莫シ蓋シ未知ノ者アルナリ是レ誤見スヘカラサルノ點タリ若シ鎖環ノ破斷シタル如キノ見アルハ是レ歴史家之ヲ修合スルノ術ヲ知ラサリシナリ

中古ノ音樂ヲ論スルニ至リテ近世ノ音樂合調術及今日音樂的言語ノ基底タル段量ノ本原ヲ知ラシムベシ

中古初代ノ音樂家ヨリ第十六世紀ヨリ第十八世紀ニ至ルノ間ニ於テ近世樂ノ先達創立者タリシ諸音樂大家ニ至ルマテ之レヲ推評統論スルコト蓋シ難キニ非ス

到底現時ノ音樂ハ此沿革史ヲ論評スルノ用ヲナサン是レ他ニ非ス今マ余輩ノ目前ニ來ツテ繙解セントスル所ノ太古ヨリ余輩ノ今日ニ至ル迄ノ事物ニ就テノ論理不可逆逃ノ結果即是ナリ

此書ハ固ヨリ音樂ノ歴史ニシテ音樂家ノ歴史ニ非ス單ニ大家ノ名、作曲時日、題號ヲ示サンノミ併カシ一二ノ小傳ト其生涯中ノ小話ハ作曲ニ附シテ聊カ示ス所アルヘシト雖モ若シ音樂術ノ進歩上連綿與ツテ力有リタル諸大家ノ履歷ヲ載スルヲ要セハ假令之レヲ畧述スルモ決シテ此小編ノ以テ含包シ得ル所ニ非ルナリ



第一圖 埃及之樂座

第一冊 太古

第一章

古代東洋諸國 エヂプト人 アシリア人 ヘブル人

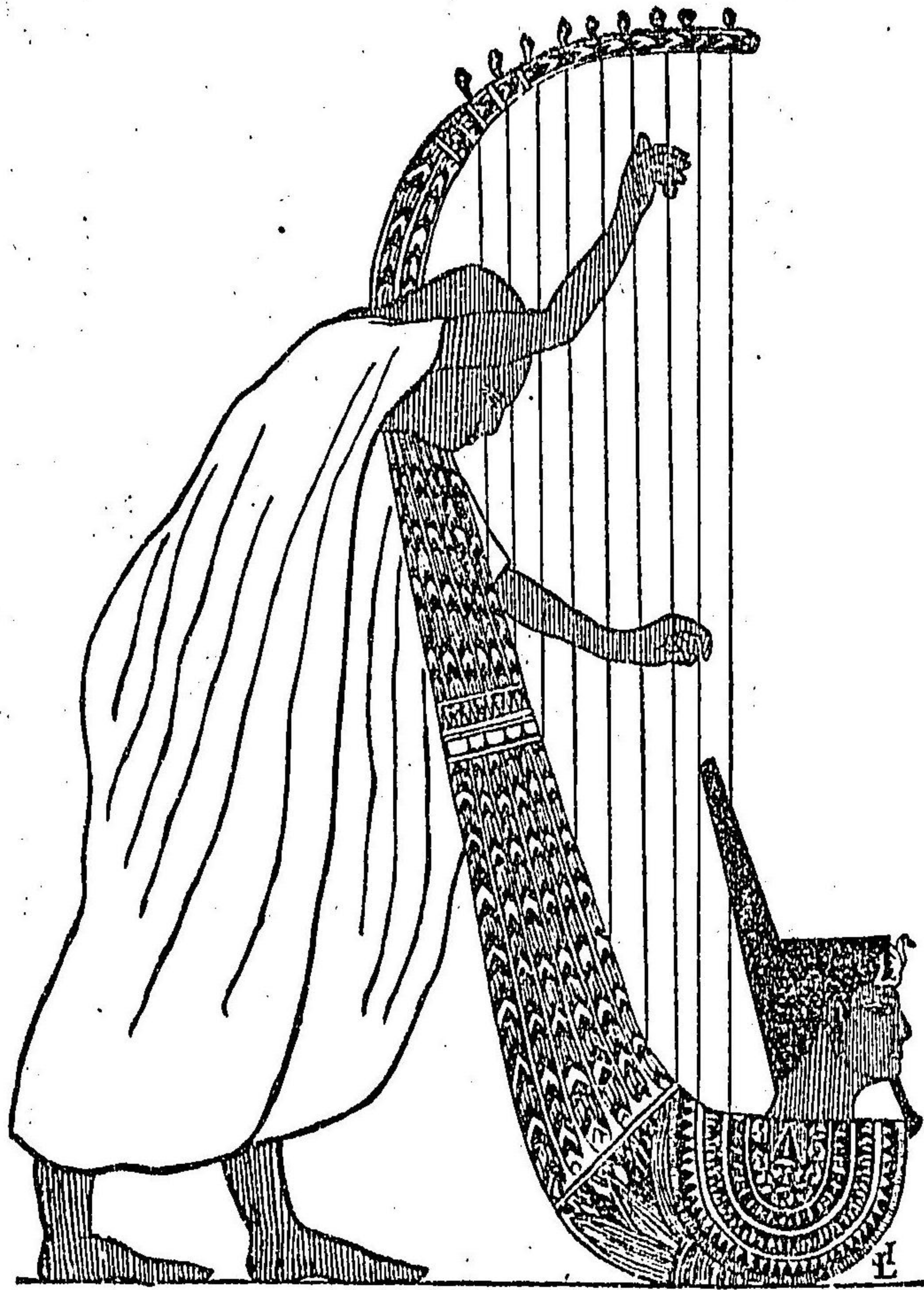
我カ佛國ノ博物館ニ入りテ古代ノ美作ニ係ル諸書、物品、圖画、等ヲ展覽スレハエヂプトアスンリーターニ、ローバピロン等東洋古代ノ諸國目前ニ再生スルノ思ヒアリ而シテ其圖画ニ就テ案スルニ音樂カ其當時ニ在ツテ尤モ重要ノ地位ヲ占メタルヲ眞ニ觀ル者ヲシテ吃驚セシム

○人ノ唱歌舞人ノ長々シキ操典ハ慢ニ「マガザ」ナール「解下ニ見ユ」ノ音ト相交リ凱旋ノ王師ハ揚々ト其車後ニ生虜ヲ從ヘ琴鼓ヲ鳴ラシテ行軍ノ列ヲ整フル等舊世界ノ故參最強者タリシ此等ノ人民ノ時代ニ於ル嚴肅ナル宗門ノ大禮灼々タル凱旋ノ儀式等皆ナ載セテ館中ノ石額ニ其形跡ヲ遺コス而シテ一トシテ音樂ヲ重大ノ職ニ置カサルハナシ

此術タルヤ蓋シ古來必ス失滅シタルヲナキノミナラス然カモ其跟跡ニ就テ之レヲ觀レハ其隆盛ナリシヲ實ニ不思議ト言フノ外ナシト雖

モ余輩固ヨリ此等ノ人民ノ音樂上ニ就テハ唯其外面ヲ知ル者ト言フヘシ即チ音樂ハ
 進歩シタル一術タリシコ之レヲ宗教ノ祭典、戰爭、饗宴ニ使用シタルコト、聲音若シクハ
 樂器ヲ用ヒテ各個人ノ居宅ニ於テ盛ンニ音樂會ヲナシタルコト、絃屬風屬打撃ノ樂器
 ハ尤モ單一ナル者ヨリ錯雜斯文ヲ極ムル者ニ至ル迄之レヲ曉知シタルコトハ余輩ノ知
 ツテ疑ハリル所ナリトシテ爰ニテ余輩學術上ノ推考ヲ駐止セン何トナレハ尙ホ深入
 ヲ試ムルキハ比喩推測ノ分界中ニ入ラントスルノ怕レアリ

テ一ブ國ノ部、ピラミッドノ内部、ラムセス三世(耶穌紀元前二千二百五十年前)ノ墓、エ
 ベルセノ窟等ハ其壁面彫刻古書等ヲ以テ此等ノ人民ノ有様ヲ尤モ能ク教示スル所ノ
 最良ノ紀念ナリ之ヲ閱スルニ或ハ全樂座ニシテ一人ノ唱歌者ニ男女數人ヲ打ツテ
 伴奏ヲナシ或ハ又多數ヲ美麗ナル樂器ヲ以テスルアリ就中「アルプ」ハ屢々見ル所ニ
 シテ大ニシテ美壯ノ裝飾ヲナセルアリ小ニシテ携帯スヘキアリ其形狀ノ如キ風雅致
 味ヲ帶ヒ其絃ノ數彼是均一ナラス四絃ヨリ廿二絃ニ至ルト雖モ大様之レヲ分ツテ三
 種トス而シテ先ツ大ナル者ヲ第一類トス即其圖ハ前世紀中旅人ブリユースナル者ヲ
 ムセース三世(紀元前凡二千二百五十年)第二圖ノ古墳中ニ發見シタル者ナリ
 ブリユースノ發見シタル樂器ル十三絃ニシテ美ナル裝飾ヲナセリ此他ニ又十絃十二
 絃ノ者ヲ見キ



手「プルア」ノ「トプヂエ」 圖二第
 様有ノ國「ブーテ」ノ代時世三「スセムラ」

第二類ニハ小ナルアル
 ルプアリ此ノ種ノ者
 ハ膝或ハ什器ノ上ニ
 置キテ彈シ又脚臺ノ
 如キモノノ上ニ置ク
 モアリ而シテ其絃ノ數
 尤モ不定ナリ巴里府
 ルーヴルノ博物館ニ
 在ル者ハ廿一絃アル
 ナリ此種ノ者ニテ右
 肩上ニ載スル者アリ
 第三類ハ三角形ノ者
 ナリ此種ノ者ハ其鳴
 動裝置ハ他ノ者ニ均
 シク只形狀均シカラ
 ス三角形ナルヲ以テ
 異レリトス



(テープノ舊跡)

「トアギエ」チ即「ラブムタ」圖三第
 器樂絃ノ

エヂプトノ人ハ「リール」ヲモ知リテ之ヲ使用セリ此樂器ハ希臘ニテ盛ニ行ハレシ者
 ナリ其模範ハ存レテレイド及ベルリンノ博物館ニ在レテ其狀重キアルプノ如ク誠ト
 ニ風味無キ樂器ナリ之レヲ持ツノ法彈者ノ前ニ縱直ニスルヲ常トスルカ如シ絃ノ數
 ハ六ヨリ十二ニ至ル

中古ヨリ傳ヘタル者ノ如ク思ハル、彈絃樂器「リュット」或ハ「キータール」ハ之レヲ
 「タムプラ」或ハ「エウー」ト名ケテ既ニエヂプト人ノ頃ヨリ在リシモノナリ
 此樂器ノ形狀種々アリ之レヲ持ツノ法胸郡ニ壓付シ右手ヲ以テ絃ヲ彈シ左手ハ絃ヲ
 壓ス絃ハ四ヨリ多カラスト見ヘタリ(第三圖)

絃屬樂器ヨリ風屬樂器ニ移レハ其種屬稍少ナシ然レモ「フリユート」(笛)ノ如キハ種類
 頗ル多ク二重管杯アリ(二本管)極メテ長クシテ側面ヨリ吹ク者アリ或ハ短少ニシテ
 發音甚銳ナルモノアリ又「トロムベット」ハ其形チ直ニシテ木或ハ銅ニテ之レヲ作ル

(第一圖)

自他ノ古代人民ノ如クエヂプト人ハ句節ヲ打ツニ用ヒタル打撃樂器ヲ多ク用ヒタル
 一明ラカナリ太鼓類ハ都テ皆ナ有リテ尙ホ錫杖、鈴蓋(俗ニ支那帽ト言フ)等ノ樂器ア
 リ且ツ手ノ丁々能ク踏舞唱歌ノ伴奏ヲナシタルコトハ尤モ奇ナリト言フヘシ(本邦ノ
 如キ隨分立派ナル音樂者ニテモ席ニ依リテハ此伴奏法ヲ行フコトアリ)

太鼓ヲ鳴ラヌノ法或ハ撥子ヲ以テシ或單ニ拳ヲ以テ之レヲ打チタリ
 千八百廿三年テローブニ於テ撥ニテ打ツ巨大ノ太鼓ヲ堀出シタルコアリシカ其形狀ハ
 全ク當時尙ホアラヒア人ノ用フル所ノ「ダラブツケ」ト唱ウル者ト一對ニテアリシト
 言ヘリ

第 四 圖



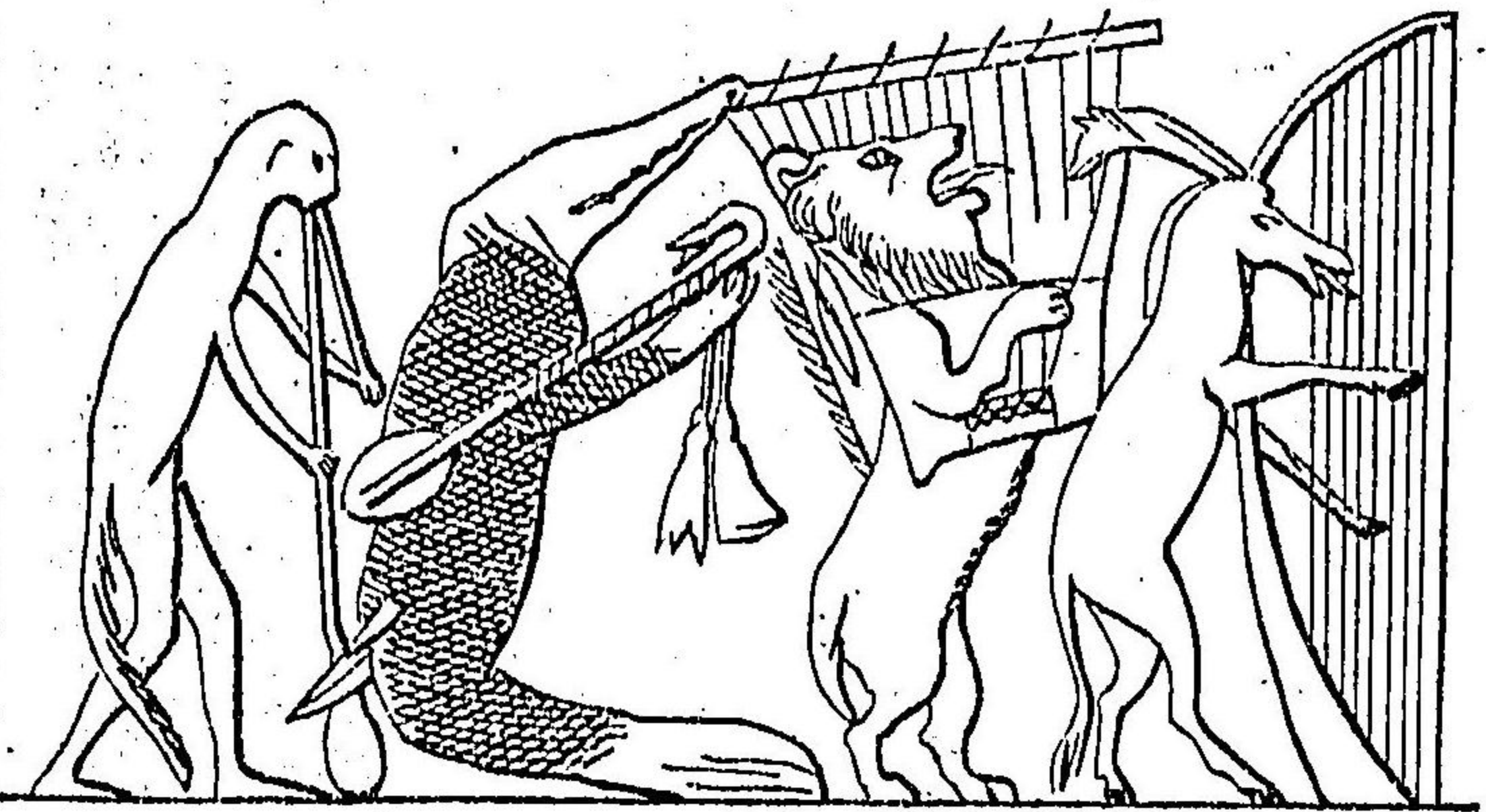
「トブヂエ」人ノ用ヒタル錫杖

太鼓類ハ故ニ其種類
 無數ニシテ大ナルア
 リ小ナルアリ長キア
 リ平キタアリ方ナル
 アリ圓ナルアリ又タ
 之レヲ打ツノ方モ從
 ツテ變様ノモノアリ
 頂イテ打ツアリ手ニ
 提ケテ打ツアリ抱イ
 テ打ツアリ肩ニ擔ヒ
 テ打ツアリ腰ニ附ケ
 脊ニ負ヒ實ニ様々ノ
 者アリタルナリ

鈴、鏡、鉢、杯モ仲々行ハレシモノ、中ニテ鈴蓋「カヌタゲツ」木魚ノ類等モ輕カラヌ樂
 器ナリシカ就中エチプト人ノ賞用シタル者ハ錫杖ナリキ其構造ハ鐵申ヲ以テ造リ之
 レニ銅、亞鉛、錐、及安知莫亞杯ノ配合物ニテ成レル環ヲ附シテ其鳴響ヲ幫助ス此樂器
 ハ牲犧ノ禮典ニ於テハ重大ノ役ヲナシ公私ノ祭式ニハ欠ク可ラサルモノナリシト
 (第四圖)

エチプト古墳ノ彫刻物或ハ圖畫ニテ今日迄ニ發見シタル古物ヲ略記スレハ左ノ如シ
 而シテ此物ノ一二ハ全ク戲壽妄想ニ過キサル者アリ

- 一 六絃及七絃ノ「アルプ」ニ面、笛一管、
- 二 十二絃ノ「アルプ」ニ面、長形ノ太鼓一個、手ヲ打チ居ル女一、
- 三 八絃ノ「アルプ」ニ面「タムブラ」ニ挺、二本笛一管、
- 四 八絃ノ「アルプ」ニ面「タムブラ」ニ挺、二本笛一管、
- 五 十八絃ノ「リール」ニ面、十四絃ノ大「アルプ」ニ面、二本笛一管、手ヲ拍テ居ル女
 樂師一
- 六 七絃ノ小「アルプ」ニ面、手ヲ打チ居ル樂手五人、唱歌者一
 (以上エチゼノ「ピラミッド」)
- 七 牲犧ノ式ニ於テ音樂ヲ奏スル圖中、八絃ノ「アルプ」ニ面、笛二管、「タムブラ」ニ挺



第五圖 埃及古紙遺片
第五圖 埃及古紙遺片

- 八 錫杖ヲ持チタル二人ノ尼
- 九 軍樂隊一隊、手太鼓一個「トロムペツト」一挺、及鈴蓋數個、
- 十 私家合奏ノ圖中ニ本笛一管、手ヲ打チ居ル樂手四人
- 十一 長形太鼓三個、内二個、方形一個、圓
- 十二 形、鱒魚音樂會ヲナスノ圖
- 十三 獸類音樂會ヲナスノ圖、猿猴二重笛ヲ吹キ鱒魚「タムブラ」ヲ襟ニシ獅々「リール」ヲ彈シ、驢馬ハ「アルプ」ヲ奏ス
- (第五圖)
- 十四 第十八世代ノ壁面ニ尤モ奇ナル、踏舞ヲ見ル其樂座ノ編成ハ三角絃器二面、大アルプ一面、「リール」二面、二重笛一管「タムブラ」一挺ナリ

圖面肖像ノ數多シト雖モ其尤モ重要ナル

者ヲ概シテ上ニ示シタルノミ而シテ此等ノ樂器ハ都テ何様ノ音樂ヲ吹彈實奏シタルヤノ點ニ至ツテハ余輩之レヲ比喩推測ニ投セサレハ之レヲ言フコ難ク

蓋シ東洋ハ一般沿革ノ一大戲場ナリシニモ拘ハラズ音樂上ノ事物ニ於テ變遷移動セズ依然古套ノ中ニ止マレルモノ、如シ果シテ上章ニ説キタル樂器中尙ホ今日ニ至ルモ自若トノ昔日ノ形樣ヲ改メサルモノアルヲ見ル

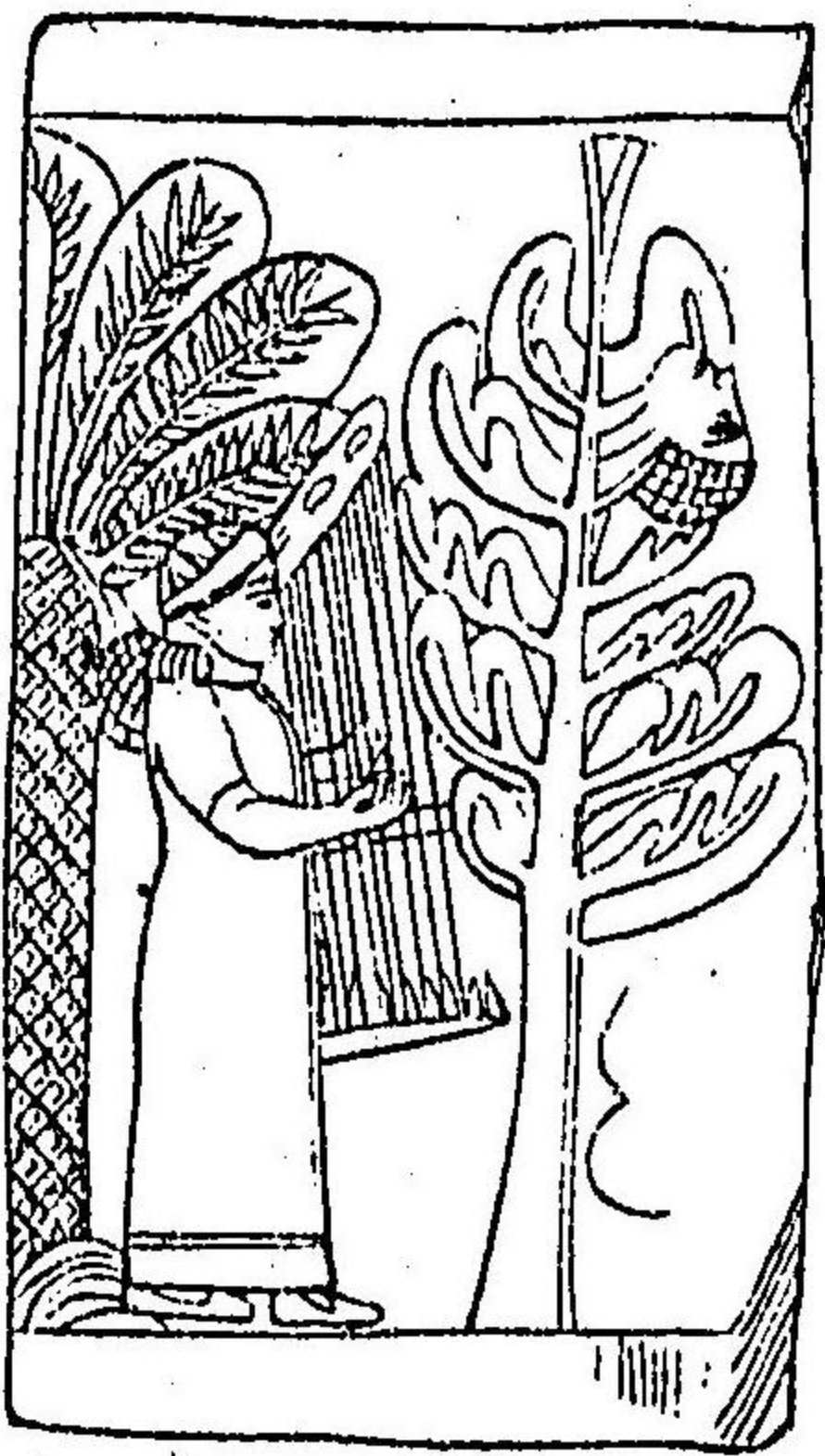
讀者幸ヒニ余輩ニ許ルセ中古ノ歴史家カ經始シタル詩詞ノ眞實ヲ愛ニ寫シ出シテ彼ノ埃及ノ歌ヲ親シク聞、マンモンカ音樂的喃々ノ聲ヲ發シテ旭日ヲ拜スルノ像ノ言ハントスルノ語意ヲ解シタル人ノ言ヲ假リテ以テ一場ノ演題トセン

マリユス、フランダースノ萬國史埃及ノ部ヲ論スルノ章ニ曰ク現今ニール河邊ニ行ハル、音樂ノ本然ヲ示スノ記事多ケレ別ニ人意ヲ傾クルコ足ルモノナキハ惜ムヘキノ一事ナリ若シ昔時ノ事物ニシテ今ニ於テ尙ホ存スルモノアラハ埃及人ノ娛樂ヲ盡シタル天然合調ノ語ルカ如ク訴フルカ如キ喃々ヲ詳細示スニ足ルヘシ此密切ニ人意ニ適フノ合調ハ則チ他物ニ非ズ太陽及ヒ水ノ所作是レナリ

旭日始メテ昇リテ埃及ノ夜露ニ浸潤シタル土地ヲ温蒸スルヤ温氣疾速ニ蒸騰シ數万ノ砂磧壘々タル大石タメニ震動シ恰モ曉天尙ホ靜ナルニ唱吟ノ聲起ルカ如ク谷深クシテ尙合調ノカヲ増シ山川之レヲ肝膽トス

日中ハ北風無情ニシテ永ク蕉葉ヲ噙マシ夜間ハ蟲ノ聲々鋭音ヲ振ツテ合奏ヲナスモ岸打ツ流レハ靜且ツ鈍ニシテ能ク之レヲ包容ス

ニール河岸ヲ去ツテチーグルヨトフラットニハ、イブ及バビロンニ至レハアシリヤ人ハ音樂ノ器物及興行ノコニ就テハエマプト「人民ト其富ヲ同フシタルヲ見ルニ足ル又アシリヤノ遺壁ニ畫キタル者ヲ觀テ之レヲ考フレバ其富其雅共ニ埃及ノ技術ニ劣ルコト遠シ且ツ此等ノ者多クハ年代稍々新シ、即チ耶蘇降誕前僅カニ十世紀ニ過キスト雖モ全ク同一ノ



圖六第

「アリシア」 「プルアノ」

①絲捲ノ轍ヲ閱スルニエマプトノ者ニ比スレハ稍少ナシ而シ其種類モ甚々多カラズ(第六圖)三角琴ハアシリヤニ於テハ隨分面倒ナル樂器ヲ以テ其用ニ充テタリ之レヲ「アゾール」或ハ

「ナーブル」ト名ク此樂器ハチイガース人ノ「タムパノント」同形ノ者ナリ九絃ニシテ之ヲ一種ノ框即チ胴ニ張リ樂手ノ前ニ水平ニ置キ樂手ハ二本ノ槌子ヲ以テ之レヲ打ツ(第七圖)

アレリア人ハ埃及人ノ如ク「タムブラ」即「キタール」(圖前ニ見ユ)ノ如キ彈絃ノ樂器ヲ知ツテ用ヒタリシユ「ズ」ニ在ルアスタルテ即チメリツタト言ヒシアシリヤノ音樂女神ノ像ニ此種ノ樂器アリ風屬樂器ハ笛及二重笛アリシガエマプトノ者トハ甚々短キヲ以テ異レリトス

(第八圖)

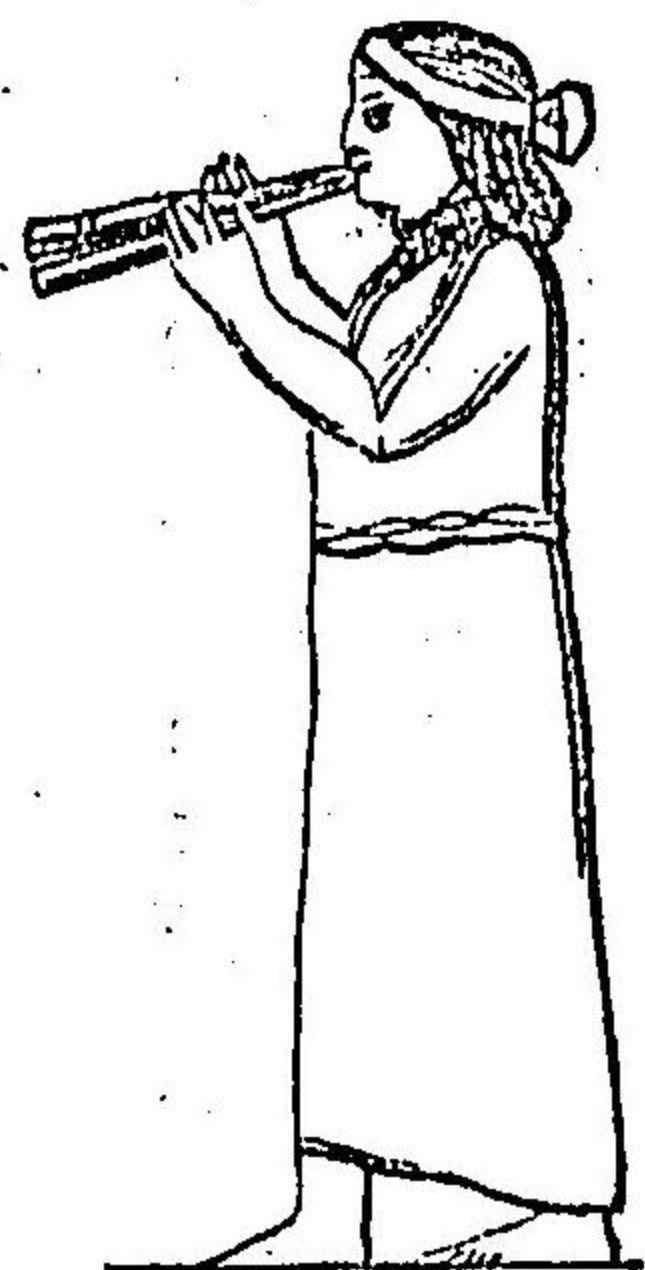
長形ノ太鼓及ヒ手ニテ打ツ小サキ太鼓即チ「タムパール」二個(當時白斯人ノ用フルモノ、如キ)長太鼓一個鏡數對ハニ、イブ及クローンシツクニ於テ發見シタルモノナリ(第九及第十圖)ニ、イブ及バビロンノ畫址ニ於テ發



圖七第

ノ國アリシア「ルゾア」

見シタル圖畫中其尤モ有益ナルモノヲ爰ニ略記シテ以テ之レヲ目擊セシメン一アルプ 七面アゾール一面



圖八第

二國「アリシア」重笛

兒童唱歌一座ニ「アルプ」及「タムブラ」チ「クローン」シツク「ユンジック」コ「テニリール」アル

- 一 及二重笛ヲクローニンジツクニテ
- 二 アグノルニ二面ヲニムルード及クローニンジツクニテ
- 三 アゾール一面及太鼓一個ヲニムルードニテ
- 四 アゾール四個ヲクローニンジツクニテ
- 五 ソール二面長太鼓一個ヲクローニンジツクニテ
- 六 ソール三面ナリ

アシリアエザプトノ音樂ニ就テ一二ノ記事ヲ得ント欲スレト此二國ノ音樂ヲ書シタル者即チ書シタル音樂一モ趾跡ヲ止メタルモノナケレハ余輩只其圖畫ノ示ス所ヲ以テ自ラ満足ヲ取ンノミ而テ又ヘブル人ノ音樂モ亦之レヲ知ルニ由ナシ此國民ハ其音樂ノ事跡ニ就テハ一モ紀念物ヲ遺傳セスト雖モ其神書中ニハ屢々音樂ノ事ヲ説キタリ

文學斯美ナル有リ詩詞想像ノ點ニ於テ斯ク熱心ナリシ一人民ニシテ其音樂ノ事ニ就テハ一モ余輩ニ遺贈スル所ナカリシハ痛惜スヘキ一事ナリ然リト雖モイヌラエルノ人民ニ在ツテ此術ヲ懈怠セサリシコハ其公式ノ禮典ニ於ケルト自家ノ居常ニ於ルトヲ問ハヌ尤モ肝要ノ位置ヲ此術ノ占メタルヲ以テ知ルヘキナリ

彼ノ高尚ナル歌章ヲ伴奏シタリシ音樂ハ何様ノ音樂ナリシヤヲ知ルコ余輩ノ熱心要求スルコ幾何ナルヲ知ラスト雖モ余既ニ言ヘリ此等ノ參考ニ供スルノ紀念碑ナク依テ表スルニ由ナシ故ニ余輩ハ啻ニ神聖ノ書ヲ涉獵反復シ帳轉苦讀スルニ止マレリ言ヲ易ヘテ之レヲ言ヘハ其語意ノ各言毎辭徒ラニ余輩ヲシテ過去事物上ニ被リタル深厚ノ蒙衣ヲ脱却スルノ難キニ苦マシム

實ニ此等ノ書

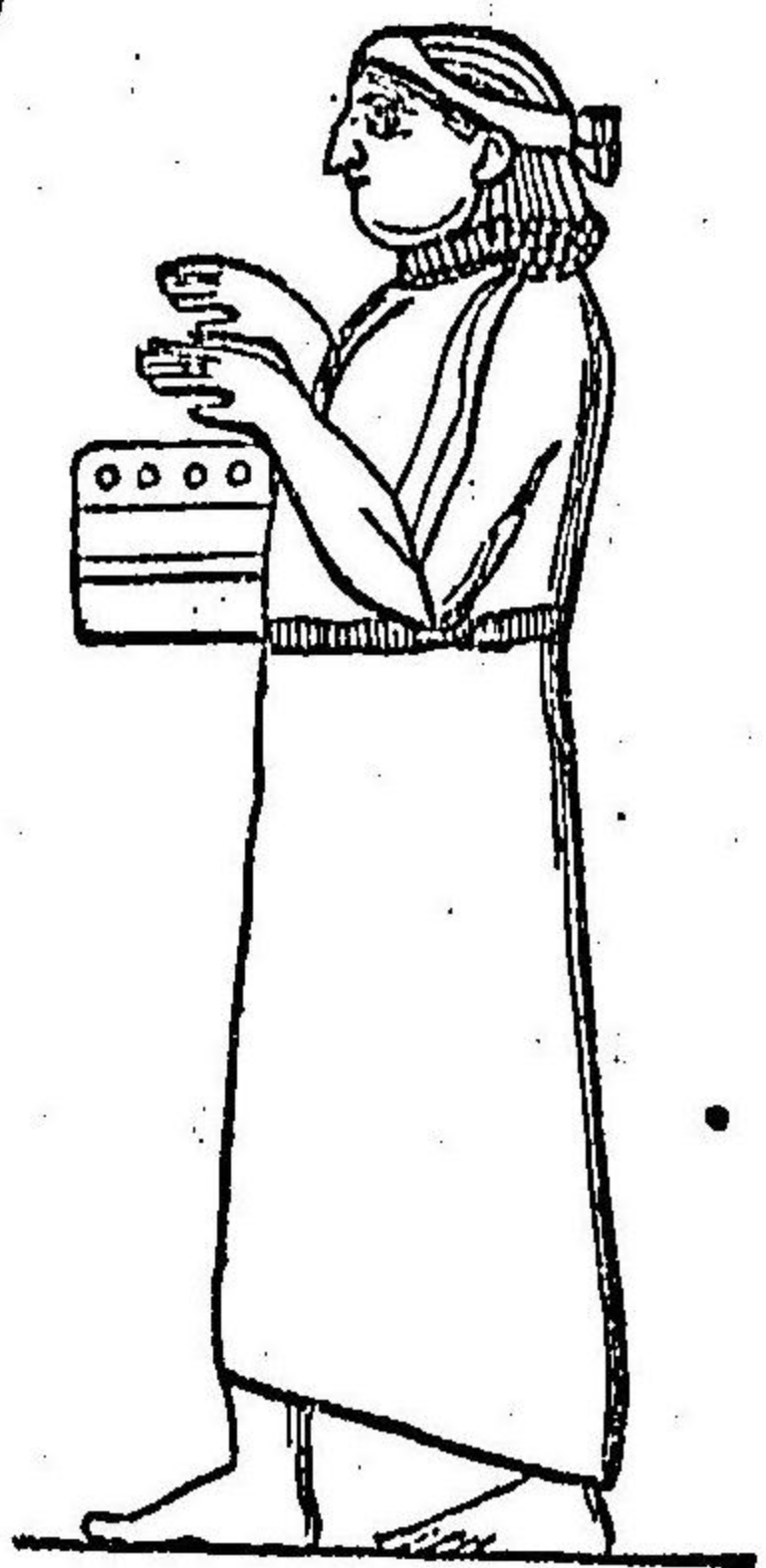
中「ギーブル」

ノ如キ卷ヲ緋

ケハ既ニ音樂

ノコヲ説ケリ

然レハ樂器ヲ



第九圖

「アリンア」ノ太鼓
 發明シタルシユールバ
 ールチユパールノ事
 歷彼ノ紅海ヲ涉リタル
 後チニ唱吟シタルモイ
 スノ歌詞ノ如キハ措
 イテ問ハストスルモ

彼ノ十二種屬一タヒパレステニスニ居ヲ定メタル後大ヒニ音樂ヲ效用シ宗教及ヒ政事部内ニ於テ宏大ナル地位ヲ與ヘタルヲ見ルアリ

シユールジユ及サミユエルノ配下ニ立ツテ音樂ハ非常ノ進歩ヲナシタリ此サミユエルト言ヘルハ此頃尤モ剛毅活潑ナルノ人ニシテ即チラマーニ於テ道人及樂人ノ學校ヲ



第十圖 「アリシア」

設立シタル如キハ其事業ノ著シキモノアリタヴェイツ
ドガサウルノ暴虐テ避リルタメ隠匿シタルハ即此處
ナリサレバダヴェイツドガ王位ニ就クヤ音樂社會ニ如
何ノ激昂ヲ來セシヤ知ルヘキナリ

此時人民ハ此感動ニ染浴シ音樂ハ浸々乎ト進ンテ政
事宗門ノ禮典中欠ク可ラサル者トハナレリ

ダヴェイド其國典秘書ヲ保藏スルタメニ一ノ寺院ヲ建立スルト同時ニ著大ナル音樂勤
務ヲ設ケタリ其編制ハ四千ノ唱歌手及樂手ヲ一隊トシ輪番ニ之レヲ行フモノナリ此
樂手ノ中二百八十名ヲ擧拔シテ他ノ樂手ニ唱歌ノ實地ヲ教授スルノ任ヲ與ヘシガ此
教師ノ内マザフエマシエドクートムノ三人ハ殊ニ有名ノ音樂家トナレリ後チ又エタ
ンナル者此列ニ加ハルヲ以テ合セテ四人トナレリ

此一隊ハ都テレヴィーノ子孫中ヨリ撰拔シ又其号令ヲ司トル上長官ノ名ヲハナニア
ト言ヒ此人ハ國王ノ命ニ非レハ奉スルコナシ

神事ノ禮典ハ通常ノ場合ニハ唱歌者十二名樂器手十二名此内九名ハ「アルプ」手ニテ
二名ハ「レター」一名ハ鏡ヲ持チ合セテ廿四名ノ樂人ニテ之レヲ行ヘリ尤モ樂手ノ
數ハ音樂勤務ノ輕重ニ比シテ増減アリシト覺フ

タルミユツドノ文令ニ依ツテ女性ノ聲ハ神聖ノ在ル處ニハ聞フルヲ聽サス故ニ寺院
ニ於テハ女子ニ換フルニレヅイ族ノ幼童ヲ以テセリ

女子ノ神ニ事フルノ修行ハ一尼官其指揮ヲ司リ女子同志ニテ之レヲ行ヒタルモノト
見ヘタリ

唱歌ノ女子ハ王宮ニ隸屬シ公衆ノ快樂宴會葬禮等ニ之レヲ用ヒタリ

サロモン死後ノ宗乱ニテ寺院ノ音樂ハ大ヒニ其美觀ヲ失ヒタリ

七百廿一年イスラエルノ王國ハサルマナザルニ侵掠セラレ十種族盡ク囚虜トセラレ
テ之レカ奴隷トナリ去レリ

是レヨリ二百年ヲ經テヨシエー國又此轍ヲ蹈ムテ子ブユカス子ツアル此寺院ヲ奪ヒ
之レヲ毀テリ

後チヘブルノ囚奴ハ彼ノ高尚ナル歌章ニ寄セテ其愁苦ヲ訴ヘタルコトハ史ヲ讀ンテ
吾人ノ知ル所又其「アルプ」ヲバビロン河邊ノ楊柳ノ枝ニ懸ケタリトノコトモ人之レヲ
知レリ

詳密精細ハ歴史家ノ渴望スル所ナリト雖モ今ハ參證ニ供スルモノ逆ハ彼ノダニユル
カ其王猶太人ヲ強ヒテ金像ヲ信仰セシメントシタル事ヲ論スルノ文中某々樂器ノ
名稱ノ獨リ存スルアルノミ而モ尙ホ此名ハ勝者ノ國語ニ屬スルヤ將タ敗者ノ國語ニ

屬スル者ナルヤ甚タ覺東ナシ其命令ニ曰ク

ヤア々々命令ナルゾ承リ候へ假令へ言語ハ同シカラストモ凡人民國民人類タル者ハ
「トロムペット」「シヤリユモ」「タムブラ」「サムビユツク」「プサルテリヨン」「コルヌミユ
ーズ」此他何ニモアレ彼ニモアレ音樂器ノ音ヲ聞カハ地ニ伏シテ「子ビユカド子ツア
ル」王カ建テタル金像ヲ敬信セヨ

ヘブル人ノ樂器ノ名目記載ハ數多發見シタルカ其文ノ如キハ叮嚀反復シタル後チ
推了シテ之レヲ潤沃シタル者アレモ到底エザプトアシリアノ者ト大ナル異同ナシ
其樂器中重ナル者ヲ掲クレハ彼ノ「アルプ」ナランカト思ハル、「キンノール」「子ベル」
「アグール」「プサルテリヨン」「ユガツブ」「コルヌミユーズ」「スコフワール」「コルヌ」即チ
神聖ナル「トロムペット」ハ尙ホシユヂア人ノ集會等ニ用フ「ハツヲツエラ」ハ「トロム
ペット」ノ一種ニシテ其性質音色ニ至ツテハ之レカ定説ヲナスニ由ナシ

「ツエルトツエレム」「メチリユツト」「ケレン」「プサンチール」等皆ナ上ニ言ヘルモノト同シ
ク搜索スルニ由ナキ者ナリ

シユヂア人ノ紀念遺物ニ乏シキカ中ニ就テアドリノ頃シユヂア人ノ反乱ノ時代ニ
造リタルシモンナシーシモンバルコカツブノ賞牌數個ヲ保存シタルアリ

此賞牌ノ圖ニ「リール」ノ畫アリ全ク希臘國ノ者ニ同シ此内一個ニ戦セタル「トロムペ
ット」ノ圖ハ其狀著シクヘブル人ノ風ヲ備ヘリ

猶太人ノ音樂上ニ就テ余輩カ圖書文章古碑ニ依テ探知シ得タル所ノ者概チ斯ノ如シ
ト斯ク論シ來ツテ後略ヲ顧ミレハ所謂音樂ナル者ニ就テハ一符號タモ遺留スルモノ
ナシ然リト雖モ幾ント廿世紀間他邦ノ人ト交ハラス其宗門ト口碑トヲ失滅セスレテ
世界ヲ統一シタル所ノ此強毅剛氣ナル人民ノ昔ヲ追想スレハ假令多少ノ變遷ヲ經タ
ルニモセヨ于今猶太人ノ集會ニ於テ唱吟スル所ノ歌章ハ古昔猶太國ノ遺芳ヲ存シ多
少昔時ノ寺院ノ歌章ヲ存スルナラン而カモ此等ノ歌章ノ一ニハ流麗愛ス可キモノア
リ凡配合ノ金屬ハ何種ヲ問ハス必ス古代純粹ノ一鑛ヲ含ムトハ蓋シ是等ノ謂ナルベ
シ

譯者按スルニ本邦建國ハ遠ク世界大洪水ノ前ニ在ルハ我歴史家ノ自認スル所ナ
リト雖ヒ書契ノ以テ實ヲ傳フルモノナク今ヲ以テ神代ノ事物ノ參考引證ニ充ツ
ヘキ者アルヲ聞カス漸ク神武以降ニ來ツテ欠如無ク歴史ノ連鎖ヲ得ルカレ然ル
ニ此以前ニ於テ音樂ノアリシヤ否ヤニ至ツテハ遺憾ナカラ彼ノ岩戸神樂ノ故事
ノ他ニ正史ノ載スルヲ見ス而シテ此時用ヒタル樂器ハ何様ノ者ナリシヤ擊奏的
樂器即チ鈴及ヒ太鼓、笛、及琴ナリトノ唱歌ノアリシヲ舞ノアリシヲハ假リニ
信ヲ置キ得ルトスルモ是ヨリ何程ノ進度ヲ以テ音樂ハ進歩ヲナレタルカノ点ニ

至ツテハ全ク考フヘカラス夫レヨリ六百三十五年ヲ經テ即チ崇仁天皇六十五年
 任那始メテ入貢シタリ之レヲ漢土ニ照比スルニ前漢元帝ノ末ナリ今マ本邦ノ音
 樂中尤モ正統ノ者タル雅樂ハ其起源殷周ニ在リトスレハ此頃漢土ハ文物稍々盛
 ナラントスルノ時ナレハ任那ノ如キ多少關係ヲ有スルノ國ナレハ其貢物ノ中二
 三ノ樂器又從ツテ樂師モ此一行ノ内ニ有リヤハ敢テ無根ノ想造ニ非ス然リト
 雖モ聲音樂ノ如キハ遠ク古代ヨリ行ナハレシハ諸證判然ナレハ敢テ論スルニ要
 ナシ實ニ神代ヨリ漢土ノ音樂ノ輸入迄ノ樂器ノ變遷ヲ知ルハ譯者カ大ヒニ渴望
 スル所ナリ按スルニ琴ノ本邦ニ起リシハ夫ノ岩戸陰クレノ故事ニ天野香山命始
 メテ之レヲ作りシヲ疑フ可ラスト雖モ之レト同時ニ創造セラレシ如キ拆鈴五十
 鈴ノ如キハ遠ク以前ニ成立セシ者ナラン其故何トナレハ八張ノ弓ヲ竝ヘテ之レ
 ヲ搔キ鳴ラシ此弓ヲ引ク人々ノ力量ノ多少ニ依ツテ絃ニ多少弛張ノ差アリ從ツ
 テ太少長短ヲ異ニシサレハ銳鈍ノ音ヲ發シ此時代ノ人々ノ耳ニ適フノ合調ヲ得
 タルカ如キハ聽ルスヘキノ事ナリト雖モ未ダ鑛業モ開ケサル當時ニ日向ノ高千
 穂ニ鉄ヲ取ツテ拆鈴五十鈴ヲ作ルトアレドモ鑛業スラ開ケサル時ニ鑄造如シク
 ハ鍛冶術ノアリシスラ甚タ不思議ナルニ況ンヤ天然ニ擬ノ俄カニ熊野奇日命カ
 丹波ノ竹ヲ以テ笛ヲ作ル杯トハ少々出來過キタル様ニ思ハルレド正史ノ載スル

所(古事記舊事記)仲々譯者カ黃吻ヲ容ル、所ニ非ルヘシト雖モ之レヲ實理ニ推
 ノ識者ノ名說ヲ俟ツナリ此後ニ至ツテ奏樂ノノ載セテ展々之レアリ即チ吾勝射
 玉命竹ヲ以テ琴ヲ作り奇彌依媛命ニ贈ル媛大ヒニ歡ヒ歌ニ和シテ之レヲ彈ス諸
 ヲノ神臣神女聽イテ甚タ風致アリトス其後穗之饒々天皇ト木花咲夜媛命トノ婚
 儀ニ於テ天皇ハ親製ノ歌章ヲ歌ヒ玉姫ノ父神大山津見命以下五名ハ伴奏ヲナ
 シ種々ノ樂器即チ絲屬ニハ琴アリ風屬ニハ笛アリ打擊屬ニハ太鼓鈴拍手、等ア
 リテ祝儀ノ樂ヲ奏シタル等ハ尤モ著シキ音樂記事トス今マヘブルアシアノ
 部ヲ譯スルニ當ツテ大ヒニ古代音樂沿革ノ欽如アルハ彼是其憾ヲ同フス依ツテ
 爰ニ數言ヲ附ス

第二編

ギリシア人

ギリシア國ノ音樂 音樂學者 哲學者 註釋者 奇異ナル起因 「リール」及

「フリユート」ノコアポロン及メルキユールノ物語リ「リール」及「シタール」ノキ

リシアノ音樂式 段及部類 句節 符號法 ギリシヤノ歌 歌章ノ風及性質

合調術 音樂的哲學 樂器 「リール」 「フリユート」 「トロムベツト」 打撃物

「ノーム」歌章及唱歌

「ペアン」及「ザチラシブ」ノコ 祭禮 遊戲即チ競争 戲場 狂言 歌舞技 音

樂私會 音樂師 詩人名人 笛ノ術及「シタール」手唱歌手 概略 以上

ギリシアノ人ノ技術ハ實ニ全世界ニ冠タリシハ世人ノ敬愛スル所ナリ則チ彫刻ノコ
工事建築ノ術高尚ノ詩文等皆其長スル所ナレハ又其音樂家タリシコ勿論ノ事ナリト
此理論ヤ眞ニ其當ヲ得タル者ニシテ之レヲ論破スル如キハ容易ニナシ得可キノコニ
非ス

ギリシア人ハ各般ノ技術皆大ヒニ相類似スルコヲ生ナカラニ感知シ尊ムヘキ致味ヲ
備ヘ音樂ノ功益美德ヲ察知シタル或ハ寧ロ能ク音樂ノ術ヲ察知シタリト言フカ適切

ナランカ何トナレハ彼等ハ詩文音樂及蹈舞ヲ三福對ノ物トシ能ク音樂ヲ知り之レヲ
實地ニ行ヒタレレ是レ余輩ノ所謂音樂ナル語ニ與フルノ意味ノ者ニ非ルヲ見ヨ
余輩ノ所謂音樂ハ其素原全ク近世ニ出ツルモノニシテ恰モ舊世界野蠻人ニ浸掠セラ
レタルノ遺趾ニ孤立スル古碑ノ如シ

ギリシアノ音樂術ハ今日余輩カ音樂トスル所ノ音樂カ音樂タル所以ノ者ヲ欠クアリ
此記事ノ末ニ至レハギリシア人ハ必ス其音樂ニ於テ句節歌章ヲ有シタルナルヘク又
假令其鑑考力ヲ高度ナリシモ其何物ニシテ音樂ニ此物アルヲ知ラス從ツテ又此点ニ
就テ一ノ意匠ナク單簡ニ之レヲ説ケハ之レヲ得ルヲ能ハサリシヲ證明スルヲアルヘ
シ然ラバ其建築ノ術彫刻ノ技詩文ノ學ハ如何ト人若シ問ハ、是誠ニ穩當平安ノ説ト
答ヘンノミ觀ルヘシ第十五第十六世紀ハ工藝技術ノ世界ナリシナラズヤ蓋人ヲフツ
エル彫刻家ミシエルアンジュハ人ノ導崇スル所ナラスヤ然ルニ何故ニ此世紀ハ同時
ニ一ノグリユツク一ノモザール一ノビエトトヴエンウエベールヲ生セザリシヤキ
リシア當時ノ音樂大家ト呼ハル、者ト雖モ上ニ言ヘル者ト彼是比較スル能ハス
キリシア人ノ唱歌シタルヲハ否認シ得サル所又唱歌ニ長シタリトノコトモ暫ク其言ニ
從ツテ之レヲ信センカ然ルニ彼等カ建設シタル「パルテノン」ノ碑花紋石ニ彫刻シタル
「ミロ」ノヴェニエヌノ像于今余輩ヲノ讀ム毎ニ潛然タラシムル彼ノラーザツブノ不

幸ナル物語ノ如キ名作アリト雖モ其當時ノ音樂ハ彫刻術詩文ト相對峙シタルヲ聞カ
ス

余輩ノ時代ニ於テハ纔カ一世紀ニシテグリユツクノ「アルセスト」ノ曲モザールノ「ド
ンシユアン」^{グエトール}「ビエトール」^{グエトール}「ヴエン」^{グエトール}ノ陰「ユツト」ノ絃樂曲ウエベールノ「フレステユツ」<sup>ロ
シニール</sup>「ギーヨーム」^{グエトール}「メイエルベール」^{グエトール}「ユグノー」^{グエトール}「ワグネール」^{グエトール}「ロアングラン」^{グエトール}
或ハ「ニエベロンゲン」ノ環等ノ名作ヲ生シタル此他幾何アルヲ知ラス
彼ノ畫ニハラフワエルノ住家ノ畫彫刻ニハミシエルアンジュノモイーズノ像或ハパ
ンシエロツノ像詩文ニハコルチイユノ「ポリユークト」ノ如キ名作ハ此當時ニ成リン
物ナルカ否ヲサルナリ

必竟スルニ余輩カギリシア人ノ事跡ヲ考ヘ得ルノ資料ハ二源ヨリ出ツ先ツ第一其理
論的及哲學的ノ論説ト第二ハ其衰頹ノ時代ノ歌詞ニ附加シテ「シタール」ノ某々記事
是レナリ爾後紀元第十六世紀以降彼ノ解釋者ナルモノ輩出シ才學兩カラ完備シタル
ノ伎倆ニ依テ比喻推測ノ德ヲ假リ遂ニ二三ノ眞理ヲ發見シタルアリ
余輩カ今日ギリシアノ學術ニ就テ汲ム所ノ泉源概スルノ如シト雖モ其一般ノ上ヨリ
觀察ヲ下シテ此國初代ノ歴史ヲ考フルニ此國ハ天自然ト四方ヨリ來レル人民ノ侵掠
擾亂ヲ經由シ次イテ此等ノ人種ハギリシア半島ノ居民トナリタルカ如シ

此數次ノ變亂ハ忽チ余輩ヲシテギリシア傳記ヲ想像スルニ屈強ナル妙稿トナレリ而シテ亦タ何時モ此各種ノ人民カ葛藤ヲ生スレハ必ズ一樂器ヲ聘入シ以テギリシアノ音樂ヲ形成シタリ

就中尤モ古キ物語ヲ掲レハフリジアン音樂派及リギアン音樂派ノ笛ト「ドリエン」音樂派ノリールトノ如キ一條ノ奇談アリ曰ク

アポロン方ノヲルフエーハギヨニシヨスノ女軍ノ爲メニ裂カレタルヲアポロンハマルシアスノ上ニ就キテ殘忍ナル復讐ヲナシタルモ遂ニマルシアス尙ホ多少ノ力ヲ保持セリ之レヲ要スルニ笛方ハ敗軍シタルコモ拘ハラヌ「リール」ハ其幾分ノ地位ヲ割イテ之レヲ笛ニ讓リタリシダースハ之レヲ知ラスシテ能ク其判別ヲナシタリ漸クニシテ此爭鬪ハ先ツ大抵ノ折合ニテ局ヲ結ヒシカ又一條ノ戰爭起レリ

ドリアン派ハトラトス山ヲ下リギリシアノ南部ニ於テエチブト及フエジヨリ來リタル住民ニ出會シ單ナル「リール」ノ神アポロンハ爰ニ於テ多絃ノシタールヲ持テルメルキユールナル者ト力戰ヲ要スルコトナリシカ此爭鬪ハ何百年ノ間繼續シタルヤ知ル者絶ヘテ莫シ

アポロンカメルキユールトデルフノ三脚榻ノ上ニ爭フノ圖ハ屢々古圖ニ見ル所ナリ「リール」笛シタールアポロンバクシス及メルキユールハギリシア初代ノ歴史ヲ象リ

シモノナリ(第十一圖)

以上ノ假象ハ隨分雅味アルノ物語ナリト雖モ此優ニヤサシキ物語ヨリ轉シテ眞面實地即チギリシア音樂ノ專門ニスレハ此書ノ如キ者ニハ過大ノ一問題ニ撞突セントス故ニ余輩ハ其概要大畧ト二三解釋ヲ得ルヲ以テ満足センノミギリシア人ハ人類聲音幅員即チ凡ソ廿四音ヲ以テ其基礎トセリ何トナレバ此幅員ハ様々ニ變化シ得レハナリ而シテ學理上此幅員ヲ先八音即チ「ラッタトヴ」ニ分カチ彼カノアリストゼーヌノ言ノ如ク總音



第十一圖 「リール」ノ爭鬪

樂此中ニ籠レリ此總幅員ヲ實地ニハ再ヒ小分シテ四音即チ「テトラコルド」ヲ含ムノ分音トナシ此總體ヲ名ケテ「テルーシース」ト號ヘリ此語ハギリシア音樂式ノ名ヲ表言スルモノナリギリシア國ノ音樂名稱ハ實ニ錯雜ヲ極メタルモ

ノコテ余輩ノ音樂ノ如ク各符ヲ名スル綴字ナカリシカ實地上ニハ之レヲ示スニ文字ヲ以テシ學理上ニハ「テトラコルド」中ニ占有スヘキ位置ヲ以テシタリ
各「テトラコルド」ニ名アリ即チ「ヒパトン」トハ鈍ノ義ナリ「メゾン」トハ中央ヲ言ヒ「ギエズ」グメノン「ハ連續」ヒペルボレヨン「ハ銳ナリ

此各個符名ハ皆ナ所屬ノ「テトラコルド」ヲ記憶セシム出發点ハ「プロスラムバノメノス」ト言ヒ鈍ナル四音ノ最鈍ノ符ヲ「ヒパチパトス」ト言フカ如ク「メーゼ」トハ總梯ノ中央ノ者銳符ヲ「チート」銳符ニ最モ近キモノヲ「パラチート」食指ノ義ナル「リカノス」ナル語ニテ「リール」ニ於テ此指ニテ厭觸スヘキ符ヲ指名スル等ノ如シ

ギリシア人ハ余輩ノ如ク各種ノ間隔ヲ知レリ即チ段、半段、及四分一段、迄モアリシナリ段ハ「チアトニツク」異名法「半段ハ「クロマチツク」同名法四分一段ハ「アンナルモニツク」合一法ヲ生セシナリ

各種ノ律ハ每個其部類ヲ異ニシ此部類各々有名ト言ハンヨリ寧ロ奇代ナル一音樂家ノ名ニ歸屬スルノ素因アリ

「トリアン」部ハ「トラーニス」ノポリム子ストニ「イヨニヤン」部ハ「ミレ」ノヒテルムニ「エヲリアン」部ハ「エルミヨニス」ノラゾスン「リヂアン」及「フリヂアン」部ハ「アヂヤカリシア」ノ神ト詩人トヲ兼ヌルアポロント戰ヒシヒヤギスマルシヤスシベールヲランブニ屬

スルノ流義トナレリ

又増補集成シタル部類ノ中ニテ「ミキヰリヂアン」ナル者アリ此段法ハ蘊奧ニシテ他ノ者ニ比スレハ最モ新キ者ニテ是レハサフヲ一及ビトクリツドノ流義ニ屬シタリ中古ノ音樂ハ此諸類ノ中「ドリアン」「フリヂアン」及「ミキゾリヂアン」ノ遺流ヲ汲ミタレト深ク之レヲ修正變改シタリ而シテ此部類ハ余輩近世ノ段ニ尤モ近似スルモノナリ余輩前章ニ於テ音樂ハ音及句節ナル二要部ヨリ成立スルコトヲ言ヒタリシカ音ハ音樂ノ物質句節ハ其精神ナリト言ヒ得可シ

此中句節ハ音樂上種々ノ變動アリシニモ拘ラス尤モ變遷ヲ經由シタルコト少ナキ者ナリ
句節ト分量トノ關係ハ歌章ノ音樂音ニ於ルカ如シ句節トハ何ソヤ分量ノ配合ニシテ歌章ガ音ノ配合ナルト一般ナリ

然リト雖モ歌章ナクトモ句節アラサルコトナシサレド句節ナケレハ一歌章ヲ成サス古代句節ノ同形ヲ温子タメル歌章ノ以テ依ル可キ者無ケレハ音樂句節ヲギリシアノ詩詞ニ研碾シテ之レヲ推考スルノ意案ヲナシタリ

此工風仲々伶俐ノ考案ナレハ其結果モ可ナリ善長ナリシカド只管此法ヲ推信シテ其極端ニ達セントシ到底詩章ノ尺度ヲ以テ音樂ノ句節ト混同セサルコトヲ要慎最モ能力

ルヘシ如何ニ適切ナル原要モ之レヲ虚張スレハ流行俚唱或ハ戯場ノ臺詞ニ依テ更ニ
音樂史ヲ著ハサン杯ノ空想ニ陷ルヘシ
發音句節ヲ眼目精神ニ銘表スルモソハ符號法ノ他ニアルフナシ此点ニ於テ支那人ト
ヒンドウス人ヲ除ケハギリシアノ人ハ今日ノ音樂書載法ヲ余輩ニ贈遺シタル最故ノ
人民ト言フヘシ

余輩ハギリシアノ人カ如何ノ法ニ依テ音樂ヲ書セシヤ且ツ之レニ二時限アリシコトハ
瑣末ノ欲簡ナキニ非レド大畧之レヲ知レリ後章ニ説ク所ヲ見ルヘシ

其符號法ハ二種アリテ一ヲ歌章ニ用ヒ他ヲ樂器音樂ニ用フ而シテ此二法共其基礎ト
スル所ノ要領相同シ則チ一ハ「アルフワベ」ノ文字ヲ用フ或ハ全字ヲ以テシ或ハ畧字
ヲ以テシ或ハ轉字ヲ以テス

尤モ古代ノ書法ハ字ヲ配合シテ各音ヲ表示ス或ハ畧字或ハ複字ヲ用フ(第十二圖)

アリユビスハキユス、ルヴィユーノ無銘ノ手書アリ不幸ニモ樂器音樂ノ例ハ誠ニ僅
々是レアルノミナルカ三篇ノ詩句アリテ此處ニギリシアノ複符號法ヲ發見ス是レ即
チ彼ノ聲音及樂器ニ用ヒタル新法ナリ是ニ於ルモ亦其符號ノ用ヲナス者ハ猶「アル
フワベ」ノ文字ナリ然ルト雖モ其中彼是ヲ相判別スルノ便ヲ補ハンガタメ之レヲ縱
横轉倒シテ之レヲ用ヒタリ

佛 トラボワー 氏原著

一音樂沿革史 (第一回)

明治廿年五月廿四日版權免許

同 六月出版

芝區琴平町四番地

出版兼編輯人 村越 銘

豫約諸君ニ限り豫約部數外ノ御註文ハ二割引ニ
ナス

第二回ヨリ豫約スル諸君江ハ第一回分ハ定價ニ

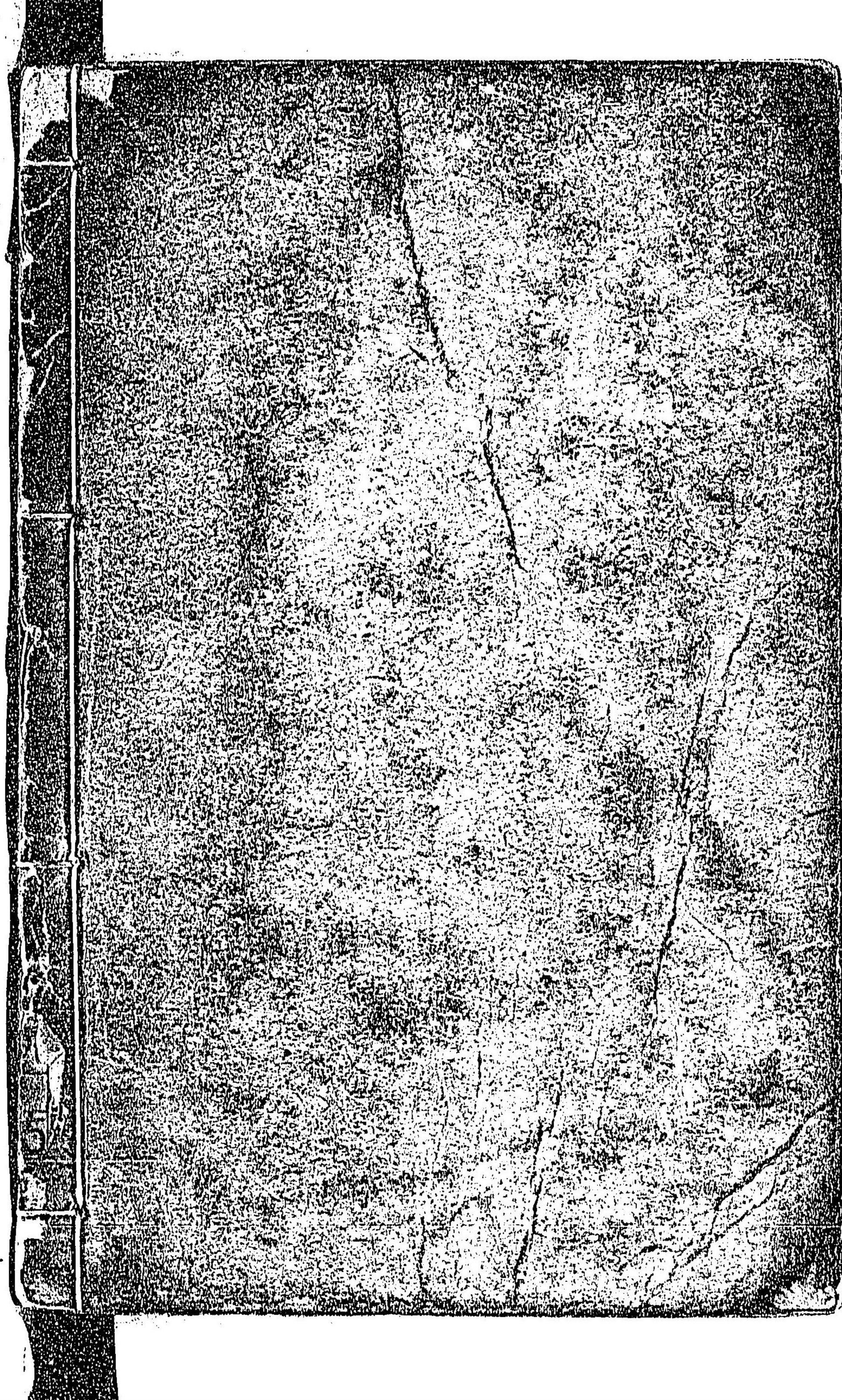
割引(金三拾錢ノ所金貳拾六錢)ニナス

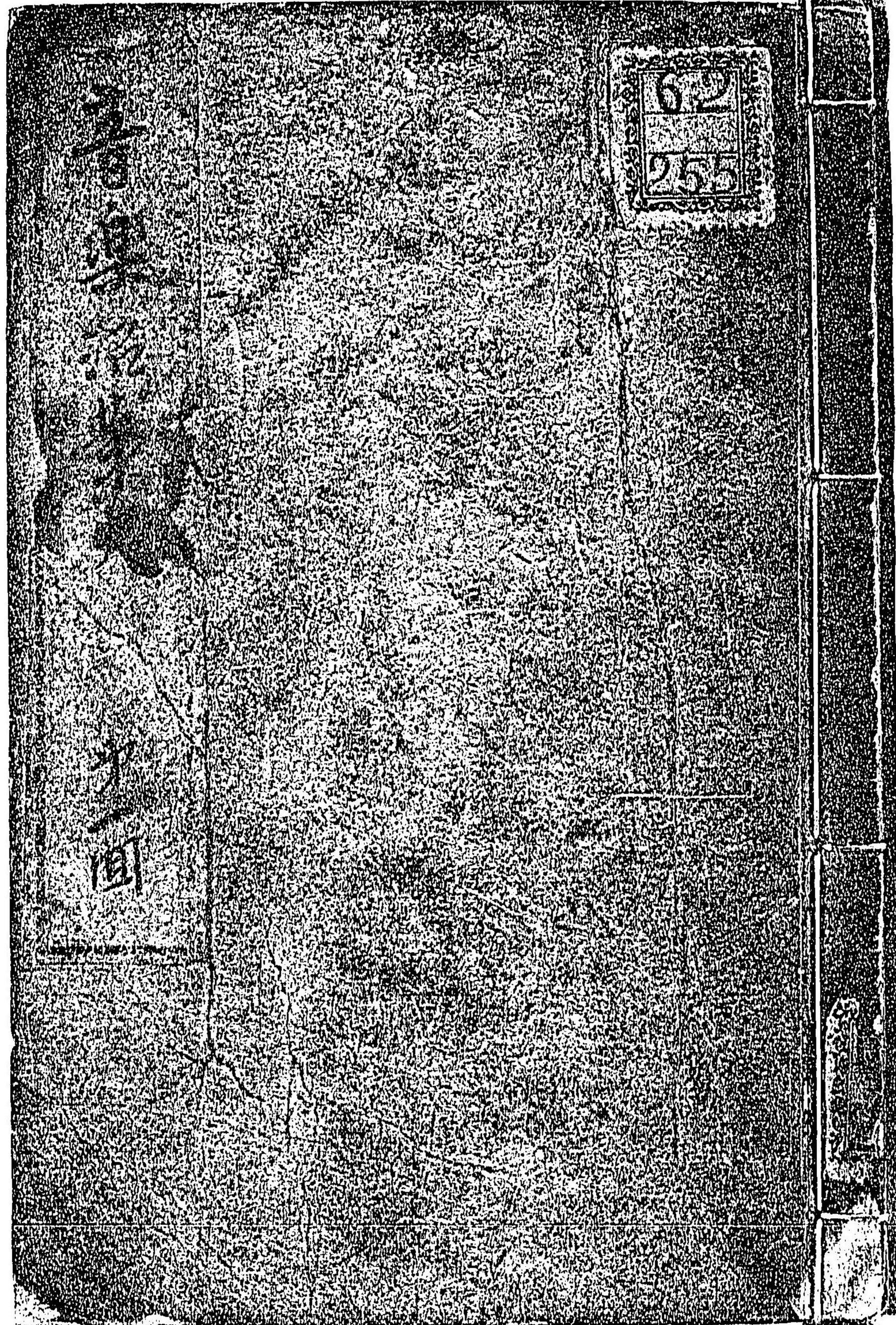
62
255



明治廿年五月廿四日

版權免許





072577-000-2

62-255

音楽沿革史 第1回

ラボワー/著

M20

CEH-0076

